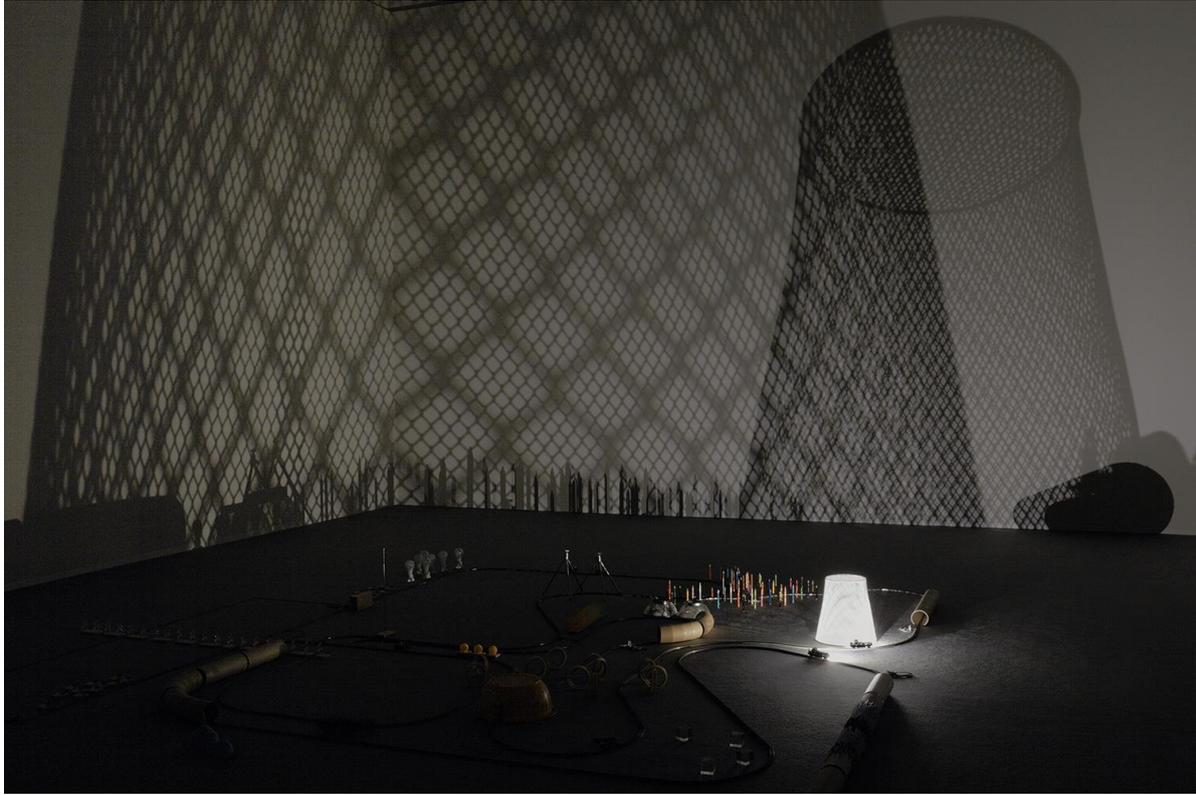


企画展のご案内

IAMAS ARTIST FILE #10**繭／COCOON:技術から思考するエコロジー**

クワクポリョウタ《風景と映像》2016年 撮影:椎木静寧 写真提供:宇都宮美術館

展覧会名	IAMAS ARTIST FILE #10 繭／COCOON:技術から思考するエコロジー
会場	岐阜県美術館 展示室2(岐阜市宇佐 4-1-22)
会期	令和7年1月10日(金)～3月9日(日) 10:00～18:00 ※休館日:毎週月曜日(祝・休日の場合は翌平日) ※夜間開館:1月17日(金)、2月21日(金)は20:00まで開場 ※展示室の入場は閉館の30分前まで
料金	一般 340(280)円 大学生 220(160)円 高校生以下無料 ()内は20名以上の団体料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、特定医療費(指定難病)受給者証の交付を受けている方およびその付き添いの方(1名まで)は無料
主催	岐阜県美術館 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

本資料に関するお問い合わせ



〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22

TEL 058-271-1313(代表) FAX 058-271-1315

URL: <https://kenbi.pref.gifu.lg.jp>広報担当:後藤正行
担当学芸員:鳥羽都子県美術館
Webサイト

美術館の情報を発信しています



公式Facebook



公式Instagram



公式X

E-mail: kouhougifukenbi@govt.pref.gifu.jp

本展覧会について

IAMAS ARTIST FILE #10 繭／COCOON:技術から思考するエコロジー

柔らかな繭玉のなかで、幼虫はその解剖学的形態をことごとく脱ぎ捨て、飛翔する蝶の生として生まれ直す。

イタリア出身の哲学者コッチャは『メタモルフォーゼの哲学』の「技術についての新たな考え」において、「繭」は個体によって製造された、生まれた後の卵であり、「メタモルフォーゼ」は純粹に技術的であると説く。「繭」は、技術についてのわたしたちの理解を覆す。わたしたちは技術を、人間の都合のいい世界を作るための便利な道具、あるいは身体の延長であると考えことに慣れている。いっぽう「繭」は、自らを内部で変化させると同時にそれを取り巻く世界を作り変える。

技術が人間だけのものでないと気がつけば、わたしたちは世界に対してより深く共感できるだろう。このような考えは、喫緊の課題である今日のエコロジー問題を乗り越えるための新たな視座を与えてくれるだろう。芸術もまた、生きることと共にある「技術」である。本展では、多様なアプローチを通じて、その可能性を模索する。

展覧会の見どころ

1. 新たな視点—芸術は、繭である

人類が環境に残す痕が看過できない状況にある今、本展では、5人の作家の豊かな芸術表現を通し、人間の道具/身体の器官投影と見做されてきた「近代技術」を再考します。

本展タイトルは、哲学者 E.コッチャの著作にヒントを得ています。テクノロジーについての近代的な考えを覆し、「繭」を、あらゆる生が自らを変容させ、構築する契機・わざと捉えるコッチャの思想を発展させ、芸術が技術と再び結びついたとき、芸術は繭となり、生命や個を孵化させると捉えます。

2. 作家と作品

フランスのメディアアーティスト、ジャン＝ルイ・ボワシエは、ライフワークであるそば猪口の収集をもとに、日本の伝統であるそば猪口に関する実験的なアプローチを行います。

クワクボリョウタは、代表作「LOST」シリーズを、岐阜県美術館で初展示。

西脇直毅、florian gadenne + miki okubo、石橋友也も各々のシグネチャー・ワークを発展させ、新作を発表します。

3. 連携事業 IAMAS ARTIST FILE ならではのテーマ

先端的なアーティストを輩出する情報科学芸術大学院大学[IAMAS]と県美術館の連携事業で、教員や院生・卒業生らの作品を紹介してきた IAMAS ARTIST FILE。本展は記念すべき10回目であり、科学的知性と芸術的感性の融合を提示します。

作家略歴

◎ジャン＝ルイ・ボワシエ Jean-Louis BOISSIER (1945-)

パリ第8大学名誉教授。1980年代からメディア・アートの分野で、アーティスト、研究者、キュレーターとして活動。1997年にIAMASで実施したワークショップをはじめとし、IAMAS教員や学生と数多くの協働歴がある。ルソーの著作の解釈やモノの生と記憶を扱う作品を制作。主著に『L'écran comme mobile』など。

アートにインタラクティブ性を導入した先駆者の一人として、80年代以降に普及したニューメディアを手段に新たな芸術体験を追求してきた。本展では「蕎麦猪口」という日本的な器について、その文化性・芸術性・技術性を問うプロジェクト《(digital) Soba Choko》の研究成果を展示する。タイトルの「digital」は「数」と「指」にかんする両義的な意味をもつ。本作は、このオブジェが伝統的に人々の手技による陶器として作られると同時に、その^{せつとうすいたい}截頭錐体の寸法が安定した比率(高さ:底辺:幅=6:6:8)をもつことに着目する。わたしたちが「技術」と呼ぶもの——「テクノロジー」と工芸的な技芸——は、その根源において、わたしたちのものづくりにいかに関わるのか。

◎クワクボリョウタ KUWAKUBO Ryota (1971-)

IAMAS教授。電子回路を素材とした「デバイス・アート」の代表作に《ビットマン》(1998)、《PLX》(2000)、《ニコダマ》(2010)などがある。2010年《10番目の感傷(点・線・面)》で第14回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。以後、光と影による内的な体験を促すインスタレーションを制作。パーフェクトロンとして「デザインあ展」(2018)の展示構成などを手がける。

2010年の《10番目の感傷(点・線・面)》に端を発する光と影による表現は、《Lost》シリーズとして展開し、これまで世界中で実現されてきた。日用品や鉄道模型によって形作られるこのシリーズは、作家による特定のアイデアに依拠しながら、その作品群は唯一の形にとどまらず、無数のヴァリエーション[異形]が展開されてきた。あるアイデアによって作られた作品は、作品をとりまく環境そのものをダイナミックに変化させ、それ自身もまた変容することをやめない。展覧会のエコロジーとは何か、作品を生態学的に探求するとはいかなることか。クワクボは、本展をこうした問いへの応答の契機と解釈し、ヴァリエーションの制作に挑む。

◎西脇直毅 NISHIWAKI Naoki (1977-)

2007年IAMAS修了。ネコや縄目の文様が無限に増殖し画面を埋め尽くすような、精緻な作品に取り組む。国際芸術コンペティション「アートオリンピック」審査員特別賞(建畠哲)受賞(2015)。個展に「超絶のボールペン画無数のネコたち」(天満屋岡山本店・福山店、2020)、「意気猫々」(ギャラリー宮脇、京都、2021)、吉村大星との二人展に「ミクロの猫と巨大な猫」(瀬戸内市立美術館、2020)など。国際交流基金海外巡回展「超絶技巧の日本」出品中(2018-)。

西脇直毅の絵画世界では、微小なネコが増殖し、数えきれないほど集まって流れを成す。ネコは異なる動物と出会い、あるときは渦を巻き青海波のような文様と有機的に接続しながら、紙面を埋め尽くす。こうしたアクションは、人類の伝統的な表現としての「文様」の生成になぞらえることができる。文様は特定の意味を帯びた単なる装飾にあらず、世界とわたしたちを直接的に結びつける。2024年から新しく取り組む《刺青の女》シリーズでは、西脇は使い慣れたボールペンのグリップを離れ、液晶タブレットとペンを用いてデジタルの皮膚に文様をほどこす。「文身」(イレズミ)が身体を世界から聖別するものであったように、現代のテクノロジーを通じて描かれる西脇の文様もまた、わたしたちに世界の裂け目を垣間見せる「わざ」である。

◎ florian gadenne + miki okubo (1987-, 1984-)

美術家のフロリアン・ガデンと、美学・芸術学を研究領域とするIAMAS准教授の大久保美紀によるユニット。生態系の複雑性に着目し、エコロジー問題に対峙する表現活動を続ける。第10回500m美術館賞グランプリ賞(2023)、清流の国ぎふ Art Award in the CUBE 2023 入選。ガデンは第27回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞(2024)。大久保は西枝財団2024年度「瑞雲庵における若手創造者支援プログラム」に採択され、展覧会「遍在、不死、メタモルフォーゼ」を企画。

ガデンと大久保は、わたしたちが自身を取り巻く世界との関係を新しく結び直すための糸口を模索する。非人間存在との関係を再考するブリュノ・ラトゥールの「モノの議会」や、技術の人間固有性から脱却するエマヌエーレ・コッチャの繭の理論、木々を見る慣習的な視点を覆すフランシス・アレの絵画論を参照しながら、エコロジー問題への対峙を軸に、日常を新しく生きる芸術的アプローチを追究する。その試みは、生態系の自生にかんする実験的な生物彫刻、生の関係性としての「食」をめぐる表現、生態系における複雑な関係性を多角的に再構成した絵画作品として展開されてきた。本展では木々の世界をめぐるインスタレーションに取り組み、わたしたちと非人間存在の「生の技術」を思考する。

◎石橋友也 ISHIBASHI Tomoya (1990-)

2023年IAMAS博士後期課程入学。大学では生物学を学ぶ。現代的な科学やテクノロジーの視点から、品種改良種や人工知能、文字などの自然と人為の境界に位置する対象の性質、構造、来歴に迫る実践を行う。2012年より早稲田大学生命美学プラットフォーム“metaPhorest”に所属。現在は生物学にまつわる芸術の研究と制作を行う。主な受賞に文化庁メディア芸術祭優秀賞(2021)、第25回岡本太郎現代芸術賞入選(2022)など。

人類が1700年かけて愛玩用に造形してきた金魚を祖先であるフナの姿に戻すというチャレンジ、都市や森のランドスケープのなかに見出される言語の幾何学的パターンを人工知能によって再認するというアイデア、川で拾得した廃棄物から制作した顕微鏡を用いて川の有機的環境を覗き見するというアクション。石橋のアプローチは、わたしたち人間とそれを取り巻く環境との関係や、わたしたちが世界を生きる手段である技術について、思考を新たにしよう挑発する。品種改良によって作られた種は自然の一部たりうるのか、人工物と自然物のあいだに本質的な差異はあるのか、わたしたちが〈ものを作る〉とはいかなる営為なのかを問う。

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]とIAMAS ARTIST FILE

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]は、科学的知性と芸術的感性の融合を目指した学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、未来社会の新しいあり方を創造的に開拓する「高度な表現者」を養成するとともに、学術文化の向上及び地域の振興に寄与することを目的に、岐阜県が2001年に開学した大学院大学です。(HP引用)

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]と岐阜県美術館との連携事業「IAMAS ARTIST FILE」は2013年に始まり、本展で第10回目となります。これまで開催した展覧会は以下のとおりです。

2013年 #01 三輪真弘 「逆シミュレーション音楽の世界」

2014年 #02 前田真二郎・齋藤正和 「記録と行為/映像表現の現在形」

2015年 #03 BEACON(伊藤高志・稲垣貴士・KOSUGI+ANDO・吉岡洋) 「LOOK UP」

2016年 #04 ALIMO・若見ありさ 「描く・動く/芸術とアニメーション」

2017年 #05 前林明次 「場所をつくる旅」

2020年 #06 クワクボリョウタ・会田大也 「みるころみるかえりみる」

2021年 #07 木村悟之・萩原健一・堀井哲史 「ウィデオー/からだと情報」

2022年 #08 福島諭 「記譜、そして、呼吸する時間」

2023年 #09 〈方法主義芸術〉—規則・解釈・(反)身体

■ 関連プログラム

■作家によるギャラリートーク

日 時:2025年1月11日(土)14:00-15:30

会 場:岐阜県美術館 展示室

在廊作家:ジャン＝ルイ・ボワシエ、クワクポリョウタ、
フロリアン・ガデン(florian gadenne + miki okubo)、石橋友也

備 考:要観覧券 申込不要

■担当学芸員によるナイトギャラリートーク

日 時:2025年1月17日(金)18:30-19:00

会 場:岐阜県美術館 展示室

学 芸 員:鳥羽都子

備 考:要観覧券 申込不要

■ナンヤローネ アートツアー

日 時:2025年1月19日(日)14:00-15:30

会 場:岐阜県美術館 多目的ホール、展示室

備 考:要観覧券 詳細は、岐阜県美術館ウェブサイトでご確認ください。

■アーティストトーク

日 時:2025年3月8日(土)14:00-15:30

会 場:岐阜県美術館 講堂

在廊作家:クワクポリョウタ、大久保美紀(florian gadenne + miki okubo)

備 考:申込不要

■ 同時開催

◆「第12回円空大賞展」

2025年1月24日(金)～3月9日(日)

◆「特集:小本章」

2025年1月7日(火)～3月23日(日)

◆「特集:フランス19世紀版画」

2025年1月7日(火)～3月23日(日)

◆「イメージとイリュージョンー田口コレクションから」

2025年1月7日(火)～3月23日(日)

◆「こいつあ春から縁起がいいわえ 能・歌舞伎・文楽…絵画にみる舞台芸術の世界」

2025年1月7日(火)～3月23日(日)

岐阜県美術館 企画展

IAMAS ARTIST FILE #10

繭／COCOON:技術から思考するエコロジー

広報画像貸出申込書

FAX 送信番号:058-271-1315

 岐阜県美術館
THE MUSEUM OF FINE ARTS, GIFU

貴社名		ご担当者名	
媒体名	(掲載コーナー、特集名:)		
ご住所	〒		
ご連絡先	TEL:	FAX:	
	E-mail:		

1. ご紹介いただける場合、貴媒体の情報をお知らせください。

掲載/放送	月	日	発売・放送(月号)/発行部数	部
掲載内容				

2. 広報画像はご使用になりますか。

 はい 画像データ到着希望日(月 日) いいえ(写真は使用せず、文字掲載のみ)

3. 別紙の写真をご参照の上、ご希望の【画像番号】にチェック☑してください。

下記キャプションの作品名称、所蔵を必ずご記載ください。

<input checked="" type="checkbox"/>	番号	ご掲載時のキャプション表記
<input type="checkbox"/>	①	ジャン＝ルイ・ボワシエ 《(digital) Soba Choko》 ミクストメディア 2019年ー
<input type="checkbox"/>	②	クワクボリョウタ 《風景と映像》 2016年 写真クレジット: 撮影:椎木静寧. 写真提供:宇都宮美術館
<input type="checkbox"/>	③	西脇直毅 《刺青の女 7》 72.8x51.5cm 写真半光沢紙にインクジェット 2024年
<input type="checkbox"/>	④	西脇直毅 《赤色のへびとネコ》 77x108.7cm ケント紙にボールペン、カラーボールペン 2023年
<input type="checkbox"/>	⑤	florian gadenne + miki okubo 《Arbre-Monde》(部分) 2022年 作家蔵
<input type="checkbox"/>	⑥	florian gadenne + miki okubo 《L'Arbre-Monde》(2024) より部分 水彩紙に墨・水彩絵具・ガッシュ 2024年
<input type="checkbox"/>	⑦	石橋友也 《金魚解放運動》 2012年ー
<input type="checkbox"/>	⑧	GengoRaw(石橋友也+新倉健人) 《バベルのランドスケープ》 2023年
<input type="checkbox"/>	⑨	GengoRaw(石橋友也+新倉健人) 《バベルのランドスケープ》 2023年

■ 広報画像一覧

①



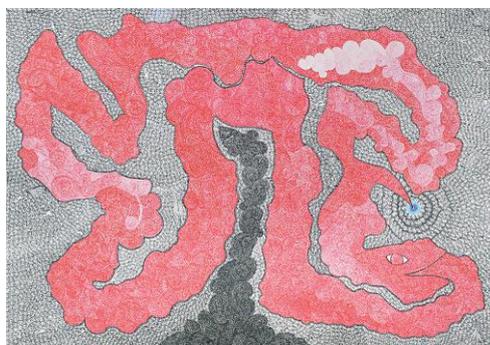
②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



【広報画像使用に関する注意事項】

- 本展広報目的での使用に限ります。
- 展覧会名、会期、会場名は、必ず掲載してください。
- 作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなどの画像の加工・改変はできません。
- 転載などの2次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードをしてください。
- 掲載・放送後は必ず、掲載誌・同録テープ・DVD等を、岐阜県美術館へ1部お送り願います。
- 会期中の会場取材・撮影をご希望の場合は岐阜県美術館までご連絡ください。